

超高速システム開発手法の検証

ースピード時代の戦略的システムー

アブストラクト

1. 近年の情報システムの特徴と課題

近年の情報システム開発の特徴として、すでに業務の効率化や省力化を計る大規模システム開発は一巡してきているため、個々のユーザ業務の競争優位性確保や差別化のために比較的中小規模な戦略的システム構築の需要が増大しつつある。このようなシステムでは、仕様自体の変化が速く流動的であるため、従来の開発方法（仕様を固めてから構築に着手する）では、「仕様自体がFIXできないための開発遅延」や、「無事システムが完成しても、そのシステム自体が現実と合っていない」といった事態が発生している。

このように、システム自体が生鮮品と化しているため、仕様が固められなくとも、また仕様が変化してもそれに追従でき、しかも一刻も早くリリース開始できる開発手法が求められている。

2. 研究アプローチ

研究アプローチとして、まずは現状の開発現場における課題を抽出し、原因分析を行った。次に、近年、柔軟な開発手法として名を上げてきているアジャイルをこのテーマに適用することが可能ではないかという推定を裏付け、さらに何が不足しているかを明確化するために、以下に示す調査を行った。

- ・ 文献による調査
- ・ 2002年度LS研分科会「Webシステムの効率的開発I」のTAへのヒアリング
(分科会内でXPを実践し、「2002年度LS研版XP」をご提唱)
- ・ アジャイル(XP)を実開発業務にて実践しておられる「富士通青森エンジニアリング」のアジャイル開発担当者へのヒアリング

さらに、実際に柔軟な開発が可能かどうかを検証し、問題点や課題を洗い出すために模擬プロジェクトを実施した。

注)「XP」とは、アジャイル開発手法の一つ「eXtreme Programming」の略

3. 研究内容

当分科会は、テーマである「超高速システム開発手法」として、アジャイルをベースにできるのではないかという推定から発足している。アジャイルを超高速システム開発手法と考えるかどうかは議論の分かれるところであるが、我々は、「超高速」を「お客様に、いち早く競争優位性を持ったソフトウェアのご提供を開始する」という意味と解釈し、開発完了までの高速化を狙うのではなく、お客様に有意義なリリースを早く行うことを狙うという意味でアジャイルを超高速開発手法の一種と考えることとした。

ベースとなるアジャイルとしては、2002年度「Webシステムの効率的開発I」分科会にて開発された「2002年度LS研版XP」を採用し、これに不足していると思われる部分を補完し「2003年度LS研版XP」を開発した。以下に「2003年度LS研版XP」の位置づけを示す。

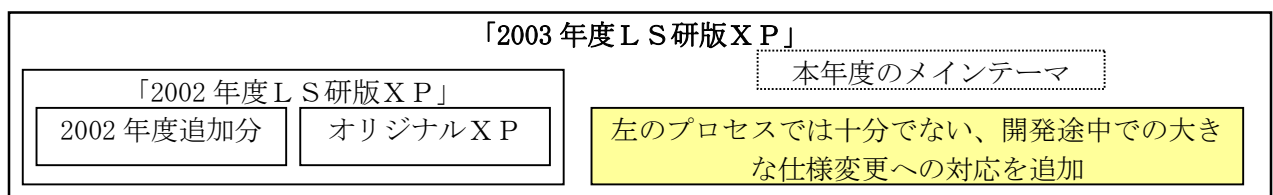


図1 2003年度LS研版XPの位置づけ

また、研究内容としては、2002 年度分科会ではアジャイルの有効性に焦点を当てていたが、本年度は、どのようにすればうまくいくのか、というようなプロジェクト実行面に重点を置いた。

3.1 模擬プロジェクトでの実施、検証内容

- ◆アジャイルの実践（自分たちでアジャイルを実践し経験してみる）
- ◆アジャイルの耐性検証
（新規追加機能発生、データ構造の変更、リリース日の前倒しをシミュレート）
- ◆アジャイルのメリット、デメリットを洗い出し、活用ノウハウを導く

3.2 2003 年度 L S 研版 X P の 2002 年度版からの追加点

「オリジナル X P」および「2002 年度 L S 研版 X P」で解決できない要件定義部分の対応として、以下の項目を追加した。

- ①データ構造等の変更（=大きな仕様変更、2002 年度版ではアジャイル不適合と明言）により、イテレーション（反復）内で対応できる範疇を超えた場合、リリース計画からの仕切りなおしを実施するルートを追加。
- ②最初に洗い出した課題に対応する形での最上流部分を中心に（図 2 左上の赤い太線による囲み部分）実行ノウハウ追加

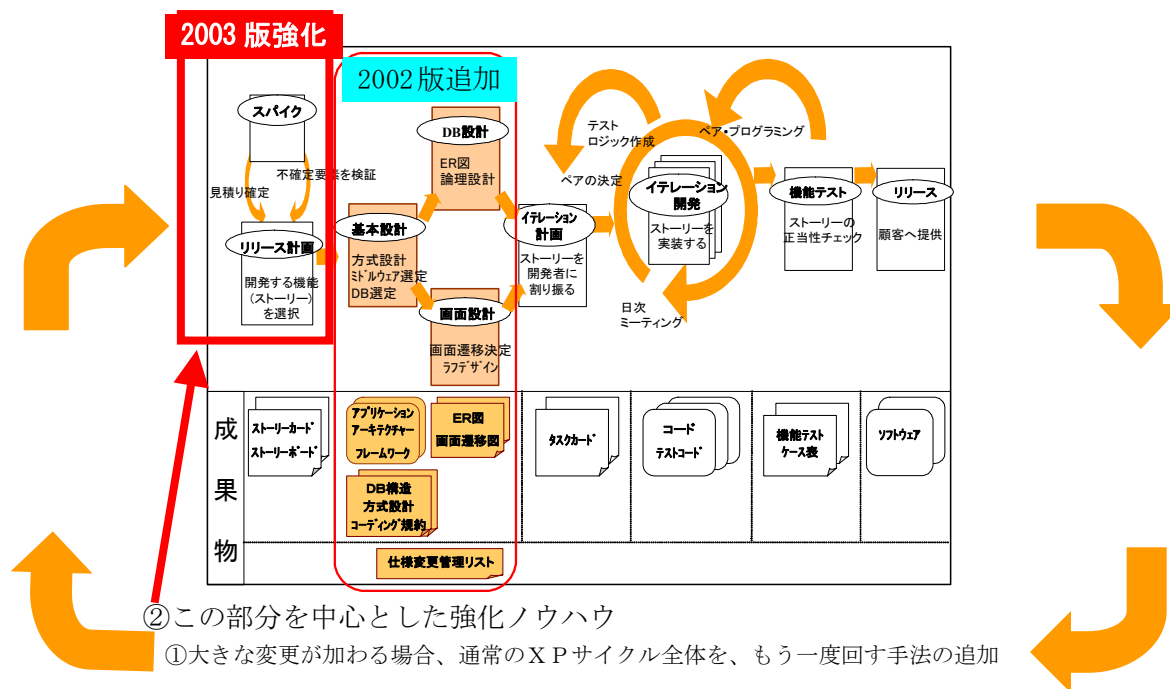


図 2 2003 年 L S 研版 X P 概要図

4. 結論

アジャイル開発は、お客様が必要とする機能を素早く提供可能な開発手法であるが、多分に経験が必要であることは否定できない。そこで、本分科会の成果であるノウハウを活用することで、アジャイル開発を最大限効率的に安全に導入が可能となると考えている。

ただし、アジャイル開発は、「銀の弾丸」、「魔法の杖」ではない。特定の条件や前提の元に実施してこそ、効果が得られる。なによりも人材が重要で実践経験がものをいうため、まずは、この研究成果報告書中に記述されているノウハウを最大限に活用し、一度は社内業務のシステム化等で経験を積んだ後、S I 事業へ適用していくのが最短のルートであると考えている。